

# ひたむきに問い続けた農泊の本質と可能性

～ぶどうとワインと農泊のまち 安心院～

(依頼時：『よくがんばった 農泊とワインとぶどうの町』)

立命館アジア太平洋大学

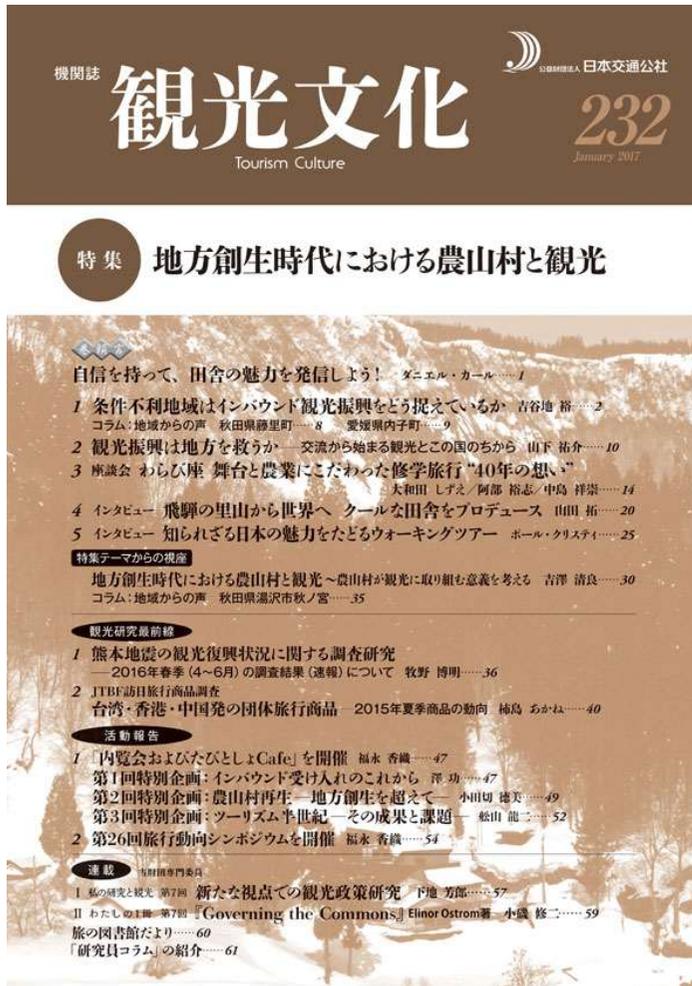
サステイナビリティ観光学部

(公益財団法人日本交通公社より出向)

教授 吉澤 清良



【資料】 観光文化232号「**地方創生時代における農山村と観光**」、2017年1月、日本交通公社



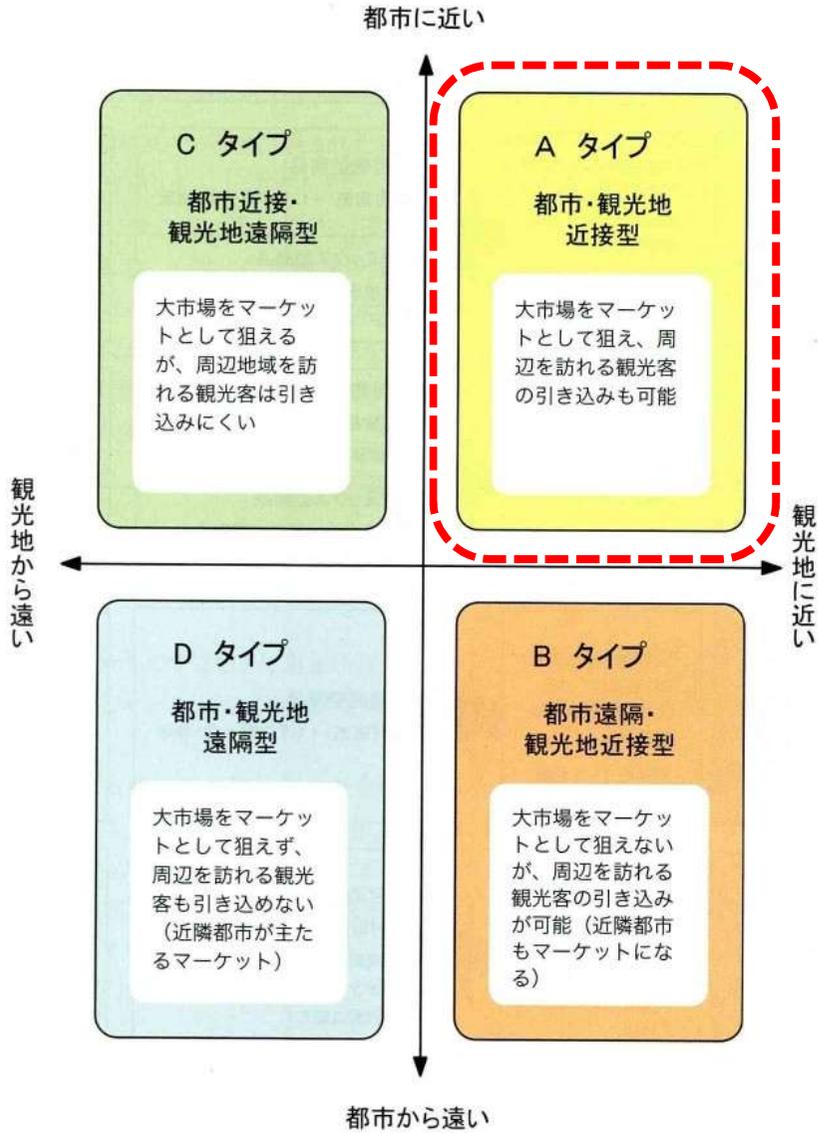
地方創生の掛け声のもと、東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけ、日本全体の活力向上を目的とした施策が、日本全国で展開されています。そうした中、地域活性化の手段として観光、その振興に取り組む地域も少なくありません。

過疎化や高齢化が顕著な農山村においても、旅行者の価値観の変化などを背景に、農山村の風景や農業、田舎の暮らしそのものを活かした取り組みが、さらに進展しつつあります。また、国内のみならず、海外でも日本の農山村の魅力が注目され、多くの外国人が農山村を訪れるようになりました。

本特集は、地方自治体アンケート調査、先進事例へのヒアリング調査などから、農山村が観光に取り組む意味と効果の検証を試み、農山村の価値を高める方法、その際に留意すべきことなどを考察するものです。



図表 6-3 立地特性からみた地域タイプと市場性



	旅行のタイプ		
	①観光（狭義）	②レクリエーション	（体験型、学習型観光）
活動特性	観る	する（身体）	する、学ぶ（精神、身体）
旅行形態	周遊 都市内回遊	単純往復	周遊、単純往復 旅行先までの距離と資源の質量次第
旅行範囲	比較的 遠い、広い	比較的 近い、狭い	比較的近いが、ブランド力が強ければ遠くまで
目的地の代替性 リピート性	なし （1回で満足）	あり	ケースbyケース
滞留性	数分～1日、2日	数時間～数日間	数時間～1日、2日

# (参考) これからのグリーンツーリズム

		“もぎとり観光型” グリーン・ツーリズム	“これからの” グリーン・ツーリズム
時代背景		<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和40年代</li> <li>・高度経済成長</li> <li>・人口過密化による都市居住環境悪化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレス社会</li> <li>・生活、教育の現場における「農」離れ</li> </ul>
ニーズ	都市住民	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業体験</li> <li>・憩いの場</li> <li>・土との触れ合い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常からの解放、ストレス解消、癒し</li> <li>・スローなライフスタイルの希求</li> <li>・本物の「農」体験を通じた教育の必要性</li> </ul>
	農村地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・販路拡大</li> <li>・直販による利幅拡大</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流人口の拡大</li> <li>・農業収入の減少→経済基盤の再構築</li> <li>・女性・高齢者の活躍の場の提供、生き甲斐</li> <li>・農村への理解促進</li> </ul>

# (参考) 「食」に対する大きな期待

## 「食」に対する大きな期待

都市住民が求めているのは、豪華なおもてなし料理ではなく、「安全・安心」で、「季節感」にあふれた、「その地ならではの」食文化との出会いである



笹寿司  
(長野県飯山市)



家庭に伝わるもち料理  
(秋田県仙北市)



小皿を使った農家レストランの演出  
(岩手県花巻市)



郷土食豊かな料理  
(大分県宇佐市安心院町)



新鮮な食材を使った石窯のピザづくり  
(大分県宇佐市安心院町)



農村風景を楽しみながらの食事  
(宮城県加美町)



郷土食豊かな料理  
(大分県宇佐市安心院町)

# (参考) 農村風景に出会う・歩く・のんびりする

## 農村風景に出会う・歩く・のんびりする

心身の癒しを求める都市住民には、都市にはない、ゆったりとした農村風景の中で過ごすことは大きな魅力である



A 里山の地藏 (長)



## 農村で温泉を楽しむ

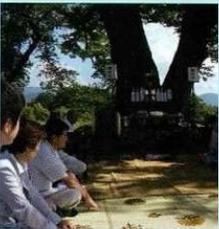
農村の温泉や共同浴場は地元の人とのふれあいの機会ともなる



荻ノ島かやぶきの里 (新)

## 農村文化にふれる

伝統芸能や祭りは、農村文化深くふれることができる



A 地域の祭 (長野県飯山市)



共同浴場 (ジモセン)めぐり (群馬県みなかみ町湯宿温泉)

## コラム

## 「食の背景には必ず魅力ある農村風景がある」

例えば美味しいお米が地域で作られているなら、美味しいお米には当然、気候・風土・自然条件が背景、基盤にあります。最近では観光の場面において食の重要性が指摘されますが、食文化の背景には地域の自然や風土があるのです。食べる魅力だけで旅行者を呼ぶのではなく、地域の農産物、食材ができて背景として、美しい川や清らかな水があることなど、地域の自然の豊かさにまで結びつけていくと、地域を楽しんでもらえるプログラムの一つにもなってきます。



8

美しい棚田 (愛媛県内子町)

# (参考) ファン、リピーターづくりのヒント

**コラム** ファン、リピーターづくりのヒント  
—「農家民宿のおかあさん」に聞きました—

## ■宮城県栗原市「有賀の里たかまった」千葉静子さん

### 【ファンを掴むポイント】

- ・農家の現場で、お客様に何も押しつけない自然体の付き合い。栗原の風空間にゆったりと身を置いてほしいと思っています。
- ・グリーン・ツーリズムはおもてなしより、気配りそして一緒に何かしようとする心遣いかな。



### 【リピーターを増やす工夫】

- ・特別工夫しておりません。リピーターがサポーターになってくれ、その方の口コミで広がっていき、ありがたいです。
- ・旬の自家製、地場産の野菜を使って、郷土料理、家庭料理をていねいに（昔からの作り方）本物のアジを伝えること。努めていることは地域を勉強し、地域のすてきなネットワークで栗原のファンを増やす。そして栗原にお金を落としてほしいと思います。

### 【その他】

- ・これまでは“金もうけ”はできないが、“人もうけ”していますと胸をはっていましたが、地域にお金が落ちないとグリーン・ツーリズムは（地域に）広がらないと思っています。

## ■新潟県南魚沼市「ラ・ファミーユ中角」中澤明子さん

### 【ファンを掴むポイント】

- ・家族のように迎え、心の交流をすること。
- ・地場産の食材を使い、調理し、料理を提供する。
- ・清潔感のある館内。



### 【リピーターを増やす工夫】

- ・四季を通して、季節を感じてもらえるように、館内の装飾を変える。
- ・旬の食材を使用して、調理方法や食材のもつ効用や地域ならではの行事食等、郷土食たっぷりの料理を説明しながら提供する。
- ・各種体験は、お客様のペースに合わせて楽しんでもらえるよう気配りをする。
- ・季節ごとにハガキを出し、交流を続ける。

## ■大分県宇佐市「百年乃家ときえだ」時枝仁子さん

### 【ファンを掴むポイント】

- ・遠い親戚がふるさとに帰ってきたような気持ちでお迎えします。
- ・清潔感と整理整頓を心がけています（部屋も自分も）。
- ・農家のメリットを最大に活用して、自家製食材、手作り、温かい心をそえて家族みんなですてやかな暮らしづくりを心がけています。

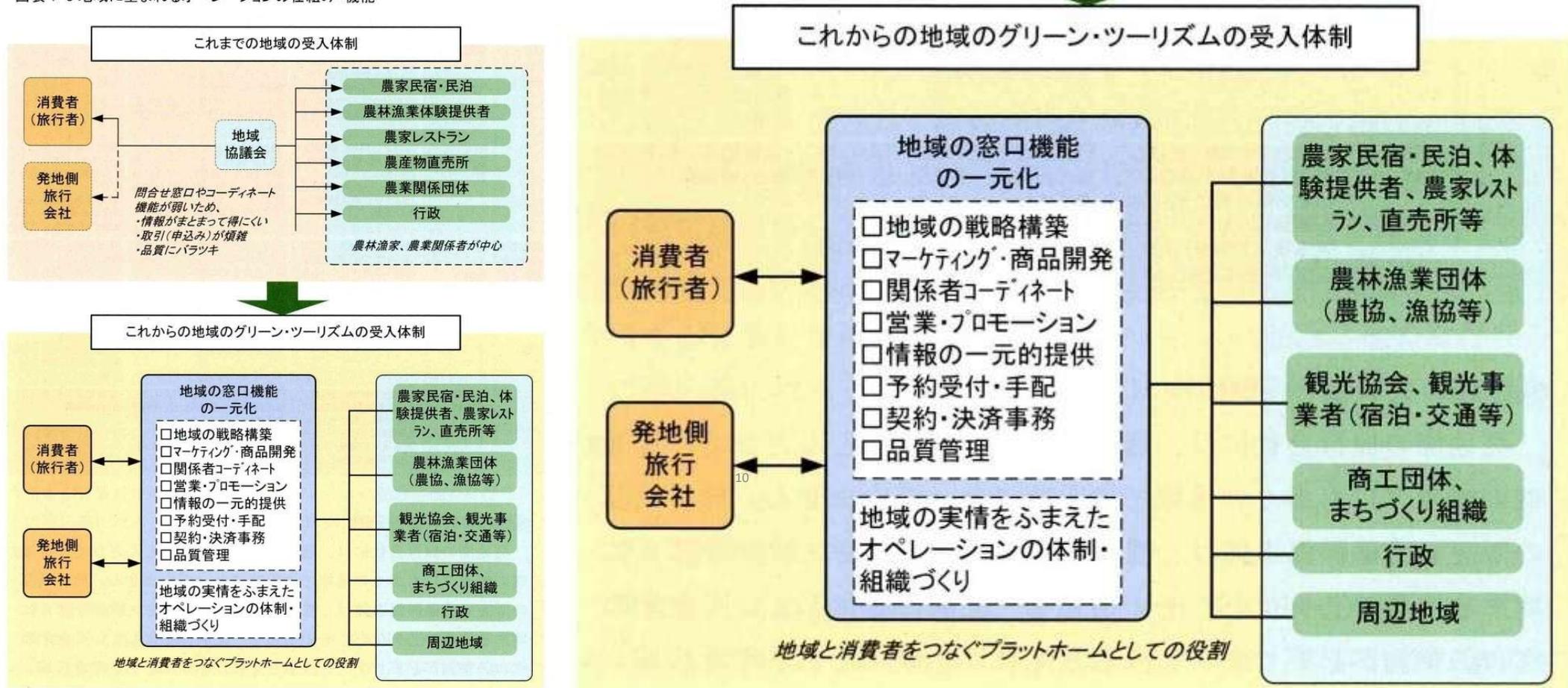


### 【リピーターを増やす工夫】

- ・お客様の年齢や性別等を聞いてから、夕食のメニューを工夫しています。
- ・一日一組限りのお客様を丁寧にお迎えすることを心がけています。
- ・年賀状やお礼状を出します。

# (参考) これからのグリーンツーリズムの受入体制

図表 7-3 地域に望まれるオペレーションの仕組み・機能





## 1. 安心院「農泊家庭」の特徴

- ① **多様な個性** : 1軒1軒が全く違う（農業、家屋、ルールなど）
- ② **温かい歓迎** : お客様ではなく「我が子」や「親戚」として迎え入れる
- ③ **日常の共有** : 過剰なサービスを排した「ありのままの生活」のお裾分け
- ④ **共同料理体験** : 提供されるのではなく「一緒の台所に立つ」
- ⑤ **飾らない人間力** : お母さん・お父さんたちの思いやる心と深い交流

12

【資料】 安心院町グリーンツーリズム研究会 公式Instagram  
(<https://www.instagram.com/japanajimugt/>) より特徴を整理



## 2. 農村の危機、安心院「農泊」の出発点

### ① 安心院が迎えた深刻な危機

- ・ 1970年代：西日本有数のぶどう産地（農家350軒・350ha）
- ・ その後：過疎化と高齢化により、農家数も栽培面積も「半減」

### ② 「アグリツーリズム研究会」の低迷（1992年～）

- ・ 初期の「アグリツーリズム研究会」は勉強会に終始し低迷。

### ◎（その後のインタビューより）農泊の出発点

- ・ 農村には観光地のようなものはないけれど、リーダーが出てきて『やろう！』と地域をまとめたら、売れる地域になれる

【資料】 魅力ある観光地域づくりの秘訣（Ⅱ. 事例編15-安心院）、平成20年3月、国土交通省総合政策局 (<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kankohiketu/002.pdf>)

【資料】 令和3年度農泊地域先進事例調査 農泊先進地域レポート、令和3年度（2021年度）熊本県むらづくり ([https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiji003115/3\\_115\\_431\\_up\\_tr4km7ym.pdf](https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiji003115/3_115_431_up_tr4km7ym.pdf))

### 3. 安心院「農泊」の歴史

#### ■ 1990年代：試行錯誤とコンセプトの発見

- ・ 1996年03月：農家だけでなく非農家も巻き込んだ計30名で新たに「**グリーンツーリズム研究会**」を発足
- ・ 1996年09月：ワイン祭りに併せて、まずは**会員制**という形で8戸の農家が「民泊」を実験的に試行
- ・ 1996年11月：ヨーロッパへの視察団を派遣（以後も継続）、「**農村の暮らし体験**」という揺るぎないコンセプトを設定
- ・ 1997年03月：安心院町議会で「**グリーンツーリズム取り組み宣言**」を議決、会員制の民泊が定例化
- ・ 1999年： **町役場に窓口を一本化**、グリーンツーリズムを目的とした**旅行者**、関心を持った**行政視察**も急増

【資料】 魅力ある観光地域づくりの秘訣（Ⅱ. 事例編15-安心院）、平成20年3月、国土交通省総合政策局 (<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kankohiketu/002.pdf>)

## ■ 2000年代：「安心院方式」の確立と維持

- ・ 2001年04月：町が商工観光課内に「グリーンツーリズム推進係」を設置、行政が窓口となって体験を受け入れる体制を整備
- ・ 2002年03月：地域からの強い働きかけにより、大分県が旅館業法や食品衛生法の規制緩和を実施（3・28グリーンツーリズム通知）
- ・ 2002年：小・中・高校生の体験学習の受け入れを開始し来訪者が急増、現在の「安心院方式」と呼ばれる民泊スタイルが定着
- ・ 2003年07月：体制強化のため、専任の事務局長を配置、受け皿となる農家の裾野を拡大
- ・ 2005年：NPO法人格の取得（2004年）、「大分・安心院グリーンツーリズム大学」を開校。「株式会社安心院長期休暇研究連合会」を設立し、職員の雇用確保と「家族旅行村」の指定管理を担い、ビジネスとして自立

- ・ 2006年03月：新「宇佐市」の市議会において、改めて「**グリーンツーリズム宣言**」が議決、農泊の理念を継承
- ・ 2014年03月：3月28日が日本記念日協会より正式に「**グリーンツーリズムの日**」として認定
- ・ 2014年09月：安心院を含む国東半島・宇佐地域が「**世界農業遺産**」に認定
- ・ 2019年03月：農泊を推進する新たな全国組織「**未来ある村 日本農泊連合**（宮田静一会長）」の設立
- （コロナ前）：年間約10,000人を受け入れる**交流拠点**へと成長
- ・ 2020年～（コロナ禍の奮闘）：パンデミックによる危機にあっても、**オンラインでの農泊体験ツアー**などを実施、交流を継続

【資料】魅力ある観光地域づくりの秘訣（Ⅱ.事例編15-安心院）、平成20年3月、国土交通省総合政策局 (<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kankohiketu/002.pdf>) ほか

- 2025年4月：十数年にわたる県への粘り強い働きかけが結実し、大分県が農泊許認可のガイドラインを改定。「一般客も含めた許可不要」という画期的な規制緩和を実現



	従来	追加した指針
旅館業法の許可	必要	不要
宿泊料	○	×
体験料	○	○

これまでは県内で新たに農泊を始めるのに、旅館ホテル運営と同等の安全基準を求めてきた。▽共同浴場の水質検査▽消火器や防火カーテンの設置といった消防法令適合▽避難経路の確保など建築基準法の検査—といった点をクリアし、県に許可を申請していた。申請手数料も2万2千円かかる。

追加したガイドラインでは旅館業法の許可を不要とし、手数料も免除になる。代わりに市町村や各地のグリーンツーリズム(GT)研究会が開く衛生講習会の受講、傷害保険加入などの安全対策、県への実績報告といった要件を課すのが大分県の特徴。受け入れも市町村や各GT研究会を經由した申し込みに限定する。

新基準で営業する家庭は、宿泊は無償で受け入れ、調理や農作業などの体験料のみ受け取れる。金額設定は各GT研究会で決めるといい、県GT研究会の宮田静一会長(75)＝宇佐市安心院町＝は「(改定で)農泊に挑戦したいと問い合わせがあった。担い手を増やし、大分県が全国に先駆けてきた都市と農村の交流を守っていかなくては」と話す。

## 4. 「安心院方式」の理念と利用者の声

(理念)

- ①心の交流で**第2のふる里**になってもらおう
- ②**我が子**のようにむかえよう
- ③農村民泊1軒1軒は、**全部違う**のが売り
- ④人は**信じられる**と感じて涙する
- ⑤日ごろの生活の**お裾分け**が農泊の基本
- ⑥**地域還元**がグリーン・ツーリズムの生きる道 等

【資料】2011.1「舞タウン 特集5 行きつく先は「しあわせ農泊」から「バカンス法」へ」、公益財団法人えひめ地域活力創造センター (<https://www.ecpr.or.jp/>)

(農泊家庭・お母さんたちの声)

①指示されなくても動ける「女性の生活力」

○女性の生活力だと思いますよ。人は何をやっている、じゃあ自分は何をする。指示されなくても動ける。女性が持つ暮らしの中の生活力。(中略)運動会じゃないですけどね、楽しいのよ。みんなで神輿を担いでわっしょいわっしょい。

②「悪口は絶対言わない。良いところをほめてあげる」という徹底したルール

○組織ができて『あの人は好かん』とか悪口は絶対言わない。良いところをほめてあげて、悪いところは見ないで口にもしない。自分のものさしだけで見ない。他人のものさしは自分とは違うことを知って、自分が勉強して、自分を成長させればいいんだから。

【資料】熊本県 視察レポート『2. NPO 法人 安心院町グリーンツーリズム研究会』内、  
宿泊者の感想より ([https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiji003115/3\\_115\\_437\\_up\\_vzte8qvd.pdf](https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiji003115/3_115_437_up_vzte8qvd.pdf))

### ③「遠い親戚」が増えていく。農泊が紡ぐ心の交流

○世代や国境を越えていろいろな人と交流でき、一緒に食卓を囲みながらの会話はとても楽しいです。利用者にどんなおもてなしをしようかという共通の話題ができ、家族のコミュニケーションも増えました。

○農泊の切り盛りは幸せで楽しいです。私は口だけ手伝って、あとは娘に任せていこうと思っています。ゆくゆくは孫もやりたいと言ってくれていますし、3代続くかもしれませぬね。

○まるで家族の一員みたいで楽しいですよ。『一回泊まれば遠い親戚、十回泊まれば本当の親戚』という合言葉のように、これからも安心院を訪れる人々と心の交流を大切にしたいです。

【資料】NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会 (<http://www.ajimu-gt.jp/>)  
安心院NGTコンソーシアム協議会 (<https://www.ajimu-ngt.jp/>)  
「地域の交流を生み出す『民泊×農業』」(マイナビ農業)

## (利用者の声)

### ①教育旅行で訪れた中学生

○農泊体験学習をすると聞いた時は不安でした。しかし、安心院の方々は**笑顔**で迎えてくれて、不安はすぐにはなくなりました。別れの日には、**頭の中が色々な思い出**でいっぱいになり、**涙が止まりません**でした。こんな**素敵な体験**を**後輩にもしてほしい**と思いました。

○何よりも驚いたのは**町の人**が**優しく声をかけてくれ**、**笑顔**で接してくれたことです。見たこともないおかずや新鮮な野菜の料理。すべておいしかったです。この3日間で**初めての貴重な経験**をたくさんすることができました。

22

### ②参加した生徒の保護者

○**親の私が体験してみたい**と思うようなことばかりで、正直うらやましいと思うくらい**素晴らしい日々**を過ごしたようです。食物を作る農家の方々の苦労、努力を少しでも理解できたと思います。

(利用者の声)

③ 一般女性旅行者

- **ここの農泊はレベルが高い**ですね。**組織がしっかりしている**ので、対応もきちんとされている。
- **こんなに星が出ている**のは見たことがない。**シンプルな朝食**でちょうどいい。**新米のおにぎり**がとても美味しかったです。

◎ (宮田静一氏) 家でもない、学校でもない、他人の家に泊まる第3の教育の場。子どもたちが変わるんです。今の子どもたちは人間不信の環境の中で暮らし、他人を信用しちゃいけない、と教えられる。でも、農泊に来ると自然体でいられる。

【資料】 自治労（全日本自治団体労働組合）第30回地方自治研究全国集会 レポート『安心院方式の受け入れの特徴』内、子どもたちの感想より  
([https://www.jichiro.gr.jp/jichiken\\_kako/report/rep\\_gunma30/jichiken/3/26/5\\_8.pdf](https://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/rep_gunma30/jichiken/3/26/5_8.pdf))

【資料】 熊本県 視察レポート『2. NPO 法人 安心院町グリーンツーリズム研究会』内、宿泊者の感想より ([https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiiji003115/3\\_115\\_437\\_up\\_vzte8qvd.pdf](https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiiji003115/3_115_437_up_vzte8qvd.pdf))

## (参考) 安心院地域観光戦略 (心を彩るまち安心院～お帰りなさいと言える場所) に関わった学生たち (APU) の声

### ○大谷杏妃 (APUサステイナビリティ観光学部)

#### 体験がもたらす気づき、意識の変化

私が農泊を体験させていただいたのは2024年の年末、冬の時期でした。昔ながらの住居やその軒先から見える山々と田んぼ、空の匂いもわかりそうなほどの透き通った空間で、大好きな白菜の収穫を体験しました。また、JAへの出荷のお手伝いもさせていただいたことで、いつも生産者の顔が見えるわけではない野菜販売の裏が想像できるようになりました。一度体験すれば、その後のモノのみかたが変わることがあるかもしれないと思いました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

### ○小溝柊汰 (APUサステイナビリティ<sup>24</sup>観光学部)

#### また帰りたと思う場所

私は中学生の時に豊後高田市で初めて農泊を経験しました。私にとってこれまでの農泊の経験はとても思い出に残っています。そのため、教育旅行としての農泊が減少していることは、非常に残念だと感じています。また帰りたと思う安心院の町や風景、そして人。安心院の農泊は団体旅行から個人旅行への転換という大きな節目を迎えていることかと思えます。心のせんとくというキャッチフレーズのもと、安心院の農泊のより一層のご発展を期待しております。

## ○高橋脩（APUサステイナビリティ観光学部）

### 心のせんとくを次の世代へ



このたびは30周年、誠におめでとうございます。

僕は中山さんのご家庭では、お腹いっぱいになって帰りました。心が洗われるような感覚が、すっと胸に染み入りました。宮田さんのご家庭では、勇気をいただいて帰りました。バカンス法、若い世代の今後の働き方としても、現実となることを望み、また信じております。今後とも、我々APUの学生がその視点を活かし、少しでも皆さまに貢献しながら、実りある関係が育まれていくことを願っております。

## ○三村香春（APUサステイナビリティ観光学部）

### 農泊が映す日本の原風景

安心院に足を運ぶたび、なぜか懐かしさを感じる。まるで祖父母の家に帰省しているような、どこか見知ったような感覚だ。昨年<sup>25</sup>の12月、時枝さんのお宅で初めて農泊を体験させていただいた。家屋の温もりと美味しい食事、団欒によって生まれるつながり。そこにはかつて日本を包んでいた優しい空気が息づいていた。しかし近年、都市への流出で若い世代が減少している。この温もりを次代へ残すため、私にできることは何だろうか。

(利用者の声)

③ 一般女性旅行者

- **ここの農泊はレベルが高い**ですね。**組織がしっかりしている**ので、対応もきちんとされている。
- **こんなに星が出ている**のは見たことがない。**シンプルな朝食**でちょうどいい。**新米のおにぎり**がとても美味しかったです。

◎ (宮田静一氏) 家でもない、学校でもない、他人の家に泊まる第3の教育の場。子どもたちが変わるんです。今の子どもたちは人間不信の環境の中で暮らし、他人を信用しちゃいけない、と教えられる。でも、農泊に来ると自然体でいられる。

【資料】 自治労（全日本自治団体労働組合）第30回地方自治研究全国集会 レポート『安心院方式の受け入れの特徴』内、子どもたちの感想より  
([https://www.jichiro.gr.jp/jichiken\\_kako/report/rep\\_gunma30/jichiken/3/26/5\\_8.pdf](https://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/rep_gunma30/jichiken/3/26/5_8.pdf))

【資料】 熊本県 視察レポート『2. NPO 法人 安心院町グリーンツーリズム研究会』内、宿泊者の感想より ([https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiiji003115/3\\_115\\_437\\_up\\_vzte8qvd.pdf](https://furusato.pref.kumamoto.jp/kiiji003115/3_115_437_up_vzte8qvd.pdf))

## 5. 次世代が牽引する新たな動き

受入家庭の高齢化に直面する中、次世代の若手たちが、**力強いイノベーション**を起こしている

### ①安心院NGTコンソーシアム協議会（代表：宮田宗武氏）

次代のグリーンツーリズムのカタチを創り出すため、様々な仕組を構築。

- **「泊・食・体験」の分離・分担**：一軒の農家がすべてを担っていた負担を軽減するため、宿泊、食事、体験を地域内で分業化する新しいビジネスモデルを推進

### ②株式会社ドリームファーマーズJAPAN（代表：宮田宗武氏、安部元昭氏）

若手農家たちが「**農家のチカラで農村イノベーション!**」を掲げ、持続可能な地域づくりに挑む

- **新たな観光コンテンツの開発**：E-bikeを活用したツーリズムなど、現代のニーズに合わせた体験プログラムを創出

- **交流拠点「農村BASE」の運営**：多様な人が集い、次世代の担い手を育成するためのプラットフォームとして活用
- **6次産業化による価値創造**：規格外のぶどうやみかんを無添加ドライフルーツに加工・販売し、フードロス削減と新たな地域ブランドを確立
- **直営カフェと情報発信**：農園に隣接するカフェの運営等により、若者たちが安心院へ足を運ぶ「きっかけ」を創出
- **地域課題の解決（空き家・放置竹林の活用）**：深刻な空き家を和モダンな一棟貸し宿へリノベーション。放置竹林を整備してキャンプ地を開拓するなど、地域の負の遺産を魅力的な観光資源へと転換

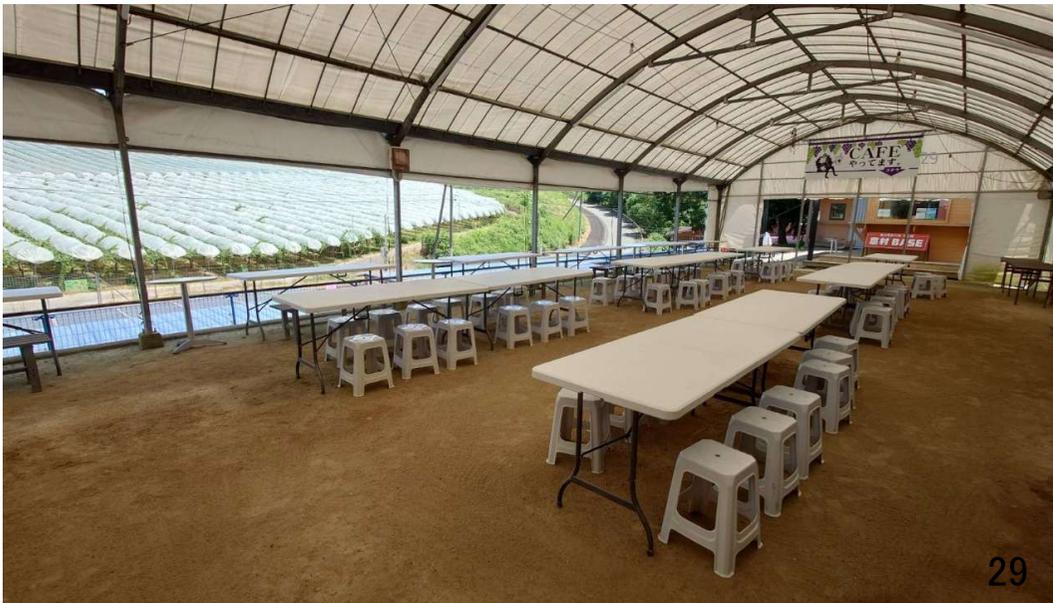
28

【資料】安心院NGTコンソーシアム協議会 公式サイト (<https://www.ajimu-ngt.jp/about/>)

【資料】九州の魅力発掘ウェブマガジン アナバナ『宿泊・食・体験、安心院をどう楽しむ？ 若手農家たちが描く、農泊の未来への挑戦』 (<https://anaba-na.com/23118.html>)

【資料】株式会社ドリームファーマーズJAPAN 公式サイト (<https://www.dream-farmers.com/>)

【資料】新R25 メディア インタビュー記事『「地域が衰退しているのに、このままでいいのか？」農業と観光の力で、地域の“再生”に挑む起業家の軌跡』 (<https://r25.jp/companies/kihara-commons/interview/887958655666749441>)



大分県立  
安心院高等学校

毎月1回開催

*Ajimu Event Schedule*  
イベントスケジュール

安心院高校の生徒がメニュー開発から接客、運営までの全てを行う、月に1回の特別な手作りカフェです。

高校生と地域のみなさんと交流の場です。産地らしい元気いっぱいな笑顔でお待ちしております。

**安心院高校生カフェ**

田舎で輝き隊も同時開催!

農村BASE  
大分県宇佐市豊原町下毛1090  
古民家BASE・龍王  
大分県宇佐市安心院町龍王779

古民家BASE

<p><b>2026年1月18日 (日)</b></p> <p>↑古民家BASE・龍王 ドリームファーマーズ 新年会(生誕祭)も同時開催!</p>	<p><b>2025年7月19日 (日)</b></p> <p>↑農村BASE</p>
<p><b>2026年2月22日 (日)</b></p> <p>↑農村BASE ドリームファーマーズ 牛鍋イベントも同時開催!</p>	<p><b>2026年8月30日 (日)</b></p> <p>↑農村BASE ドリームファーマーズ ぶどう収穫体験も同時開催!</p>
<p><b>2026年3月8日 (日)</b></p> <p>↑農村BASE 大分大学生による 社蠟小屋イベントも同時開催!</p>	<p><b>2025年9月13日 (日)</b></p> <p>↑農村BASE ドリームファーマーズ ぶどう収穫体験も同時開催!</p>
<p><b>2026年4月19日 (日)</b></p> <p>↑古民家BASE・龍王</p>	<p><b>2026年10月4日 (日)</b></p> <p>↑農村BASE ぶどう収穫体験 農縁サミット、マルシェも開催!</p>
<p><b>2026年5月17日 (日)</b></p> <p>↑古民家BASE・龍王</p>	<p><b>2026年11月8日 (日)</b></p> <p>↑古民家BASE・龍王</p>
<p><b>2026年6月21日 (日)</b></p> <p>↑古民家BASE・龍王</p>	<p><b>2026年12月6日 (日)</b></p> <p>↑古民家BASE・龍王</p>

イベント詳細は安心院高校の公式SNSで配信中

【お問合せ】大分県立安心院高校 ☎ 0978-44-0008 🌐 <https://kou.oita-ed.jp/ajimu/> @ajimukoukou\_official

# <観光庁「地域観光魅力向上事業」>

## 「泊・食・体験の分立型グリーンツーリズム」で持続可能な地域をめざす —宇佐神宮及び湯布院・別府からの誘客を図る大分県宇佐市安心院町『体験型観光コンテンツ』創出事業

本事業は、「別府・湯布院エリアといった周辺観光地からの誘客を見据えた、宇佐市独自のグリーンツーリズムコンテンツの創出・磨き上げを図るもの」です。特に、近年主流となっている個人旅行・個人手配層に対応した「泊・食・体験の分立型モデル」を構築することで、地域課題である経済波及の限定性や販路・マーケティングの未整備といった問題の解決を目指します。

「泊・食・体験の分立型グリーンツーリズム」で持続可能な地域をめざす——宇佐神宮及び湯布院・別府からの誘客を図る大分県宇佐市安心院町『体験型観光コンテンツ』創出事業  
大分県宇佐市 株式会社ドリームファーマーズJAPAN

事業概要	本事業は、「別府・湯布院エリアといった周辺観光地からの誘客を見据えた、宇佐市独自のグリーンツーリズムコンテンツの創出・磨き上げを図るもの」です。特に、近年主流となっている個人旅行・個人手配層に対応した「泊・食・体験の分立型モデル」を構築することで、地域課題である経済波及の限定性や販路・マーケティングの未整備といった問題の解決を目指します。	
事業を実施する地域の課題	①宇佐神宮を中心とした一部エリアを除き、観光による経済波及効果が限定的（別府・湯布院等と比べて伸び悩み）②個人旅行・個人手配・オンライン予約といった誘客体制が未構築。③観光マーケティングが未熟。	「宇佐神宮」参拝という既存の来訪動機に加え、新たな地域体験コンテンツを通じた“複数の来訪目的”の創出を実現。 <u>宇佐市の観光地としてのポジションを一段引き上げる礎を築きます。</u>
地域の課題に対するこれまでの取組	① 自社・自組織の取組としては、「食」や「体験」についてはまだ十分なバリエーションや魅力的なプログラム造成には至らず、他地域（特に湯布院・別府）と比較した際の滞在動機の弱さが顕在化していました。 ② 他社・他組織の取組としては、地域資源を活かすイベントは実施されているものの、マーケティング戦略や販路開拓の視点が欠けており、宇佐市全体としての観光の「伸び代」が活かされていませんでした。	
造成する観光コンテンツの具体的内容及び本事業の取組方針	以下のような独立して予約可能な「分立型コンテンツ」=泊・食・体験分立の観光コンテンツを造成します： ①泊：再生した古民家での宿泊・交流・文化体験（宇佐神宮に関連した神仏習合や伝統建築の物語解説等） ②食：宇佐市の特産品を活用した食事体験（地域産品×季節食材の料理体験） ③体験：宇佐市ならではの作業体験（ぶどう狩り・竹工藝体験・青竹踏みづくり等） また、上記コンテンツのPR・情報発信強化を行っていきます。	
アピールポイント (独自性・新規性等)	造成する観光コンテンツは、個人旅行者にとって利便性の高い予約導線（OTA、SNS連携、地域観光HPなど）を整備した上で、他の旅行会社・宿泊施設等とも組み合わせ可能な自由設計のツアー造成が実施可能となり、各社の収益性が高まる継続的な観光コンテンツの磨き上げが実現し、地域全体での販路拡大に繋がります。	
実施体制	宇佐市：観光振興・広報協力、宇佐市観光協会：観光ガイド・ツアー監修、豊の国千年ロマン観光圏：旅行企画・モニターツアー実施、地域内事業者&学校関係：コンテンツ造成協力	スケジュール 7月～：関係者連絡会議、7～9月：広報物作成、7～8月：ツアー造成、SNS広告実施等、9月～1月末：モニターツアー6回実施、WEBサイト制作、OTA向け掲載情報票作成、SNS広告実施、2月末：事業実施完了
販路開拓計画及び情報発信計画	旅行会社と連携することで、販売可能な観光コンテンツを作成するだけでなく、顧客需要を捉えた上で継続的に提供していきます。また、デザイン会社を通じてSNSを中心に都市部・海外に向けて発信を行います。	事業の目標 (KGI・KPI) ※販売単価、集客数等、収益性を定量的に記載 【KGI】R7年度：客単価（日帰りツアー客：5,000円・宿泊ツアー客：50,000円）×年間販売数（日帰りツアー客：80名、宿泊ツアー客：50名） 【KPI】SNSインプレッション総数200,000回、参画事業者数10者、モニターツアーアンケートでの満足度50%再来訪意向50%
事業の将来性 (令和8年度以降の取組、持続可能な観光地づくりにへの寄与)	造成した観光コンテンツ定着と顧客を地域のファンへと育成する工夫を実施し、連携先を増やしていきます。また、観光庁：第2のふるさとづくりプロジェクトへの参画で、大分県初となる登録を目指します。ツアー実施（泊まる&来訪する）以外の取り組みによる関係性の維持のため、農泊家庭のおばあちゃんが作った野菜・米を購入して支援できる販売サイトや販売方法（サブスクリプションサービス・定期便）を確立していきます。	

事業の分類

販売型	新創出型	○
-----	------	---

※当てはまる種類のボックスに○を記入

<泊・食・体験分立の「泊」>



<泊・食・体験分立の「食」>



<泊・食・体験分立の「体験」>



観光コンテンツを「分立型コンテンツ」として分類、個別予約可能な他、2つ以上を組み合わせ、1日ツアー、2～3日ツアーなど自由に設計できるコンテンツとなります。これらは単独でも収益性が高いコンテンツとして磨き上げるものとなっています。

## 6. 農泊の本質と可能性、更なる高みへの期待

### ◎農泊の本質：心を通わせる「日常の共有」

#### ○「生活のお裾分け」

- ・ 過剰なサービスではなく、ありのままの日常を共有

#### ○「家族」としての歓迎

- ・ お客様としてではなく、「我が子」や「親戚」のように温かい出迎え

#### ○共同体験を通じた交流

- ・ 郷土料理を一緒に作るなど、共に活動することによる深い交流

#### ○「第3の教育の場」

- ・ 自然体で過ごし、人との信頼関係を築き直す貴重な居場所に

## ◎農泊の可能性：地域と訪問者でつくる「未来」

### ○「共創型」観光への進化

- ・消費型観光から、訪問者と住民がふれあい、共に価値を高める観光へ

### ○「第2のふる里」の創出

- ・世代や国境を越えた交流を生み、「また帰りたい」と思える心の拠り所に

### ○イノベーションによる地域課題解決

- ・若者による新たなビジネス（空き家活用や分業化など）を創出

### ○持続可能な農村の原動力

- ・未来に続く、しやなやで持続可能な農村づくりを牽引

# ◎更なる高みへの期待

着地／地域

発地／市場

三大旅行目的

観光



レクリエーション

観光産業



みんなで、観光まちづくり！

他関係者



移動：交通運輸業



しめす

# 観光

みる

宝：自然、文化、政治、  
風俗・風習など

旅行業



情報



その他



◎旅行を誘発する要因

○○ × 金 × 動機

## ◎真の地方創生、農泊の成長に不可欠な長期休暇（バカンス）

### ○長期滞在の必要性

- ・農山村をはじめとした地方の創生には、日本人が「長期で休める社会構造」への転換が不可欠。

### ○農泊とバカンス（制度）はセット

- ・農泊を「一般的な旅行」から「滞在型観光」へ成熟させるために不可欠

### （参考）日本で「長期休暇の制度化」の壁

- ①国際基準とのギャップ：ILO（国際労働機関）が定める「少なくとも連続2週間の年次有給休暇」を未批准<sup>34</sup>
- ②属人化と同調圧力：業務が個人に依存し、「長期間休むと迷惑がかかる」という日本特有の強い同調圧力
- ③産業界の人手不足と「細切れ取得」：人手不足による反発が強く、連続休暇ではなく数日・時間単位の取得が主流に

## (参考)

グリーンツーリズム 心の旅へ

# 未来ある村 日本農泊連合

## 未来ある村日本農泊連合とは

都市と農村に暮らす者たちが連携し、農村が都市の人々の憩いや休養の場となり、農村で暮らす者たちや若者が本気で取り組める農泊の法整備を目指す連合です。

## 活動内容

- (1) 農泊の啓発・普及に関するシンポジウム・研修会を開催し農泊の質の向上を目指す。
- (2) 都市と農村を同時に救う欧州のような長期休暇制度(バカンス法)の法整備のため、まずIL0132号条約の批准を目指す。
- (3) 親でも学校でもない「第3の教育」農泊教育旅行の法整備を目指す。
- (4) 農泊の質の向上・推進・連携のため「農泊推奨の証」の発行

### 【活動の目標】

本格的な農村再生のためには、農泊を中心としたグリーンツーリズムが安定した産業になる必要があります。そのためには、第一に一般の日本人が長期休暇を取得できるようなバカンス法(IL0132号条約)の批准などによる法的なシステム作り、農泊の規制緩和、農家の受け入れ施設の充実、農業・農泊普及員の新設等が必要となってきます。それらの重要性をアピールしながら関係機関と協議する場を持ち、共に進めていけたらと願っています。また、農村振興のためだけではなく、バカンス法は日本人の心の再生にもつながっていくのです。

欧州の農村は上記を整備することでグリーンツーリズムが一大産業化し、貧困からの脱出を果たして村々は見事に蘇っています。当面、日本型のグリーンツーリズムを実践する中でヨーロッパ(ドイツ・イタリア・オーストリア・フランス等)の農村を目標に置き、日本の農村の再生を目指していきます。

### IL0132号条約とは…

国際労働基準のことで、通称バカンス法と呼ばれています。

- ・ 休暇は1年に最低3週間 ・ 最低2週間の連続休暇の付与 ・ 疾病等による休暇は有給休暇に含めてはならない
- といった内容となっています。現在ドイツ・イタリア・スペイン等、世界37カ国が批准しています。

◎ 未来へ：都市と農山村の「真の交流」をめざして

○都市と農村の「協働関係」へのアップデート

- ・都市から農山村への支援という構図を脱却。互いの価値を尊重し、強みを活かして共に課題を解決するパートナーシップへ



安心院を「心豊かな社会」実現の先駆者に！

ご清聴、ありがとうございました。